月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.
160



強く……！
強くなりたいです!!
も～っと集まれ！ ファルコム学園

ファルコムニュース
英雄伝説 碧の軌跡
ショートストーリーズ

登場キャラクターが続々と明らかに！
フィールド&コマンドバトルの新システムや
高位アーツの情報も到着！

『英雄伝説 界の軌跡』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

英雄伝説 界の軌跡（カイノキセキ） -Farewell, O Zemuria-

『軌跡』シリーズ最新作『界の軌跡』の発売日がついに決定！　そして、今号も登場キャラクターの情報が続々と登場したほか、フィールド＆コマンドバトルの新システムや導力魔法（アーツ）の新たな新要素の情報が到着した！

発売日が9月26日に決定！

登場キャラクターの情報が続々と到着 フィールド&コマンドバトルの詳細や アーツの新情報の明らかに！



Prologue

「120X年、全てが終わる」

ゼムリア大陸の終焉を予言した
導力革命の父、C・エプスタイン――

その“Xデイ”が差し迫るなか、
崑崙の地に築かれた巨大基地から
一基の導力ロケットが打ち上げられようとしていた。

「人は大気圏外へと辿り着けるのか？」
「大陸の果てには何が在るのか？」
「人類は“世界”の真実を識ることができるのか？」

有史以来の大事業を見届けようと全世界が注目する中、
技術的特異点（シンギュラリティ）とも言うべきオレド自治州のとある場所には
《裏解決屋（スプリガン）》の青年をはじめ
各地からの勢力が集結しようとしていた――。

果たして、
遥かなる天を目指す一筋の軌跡はゼムリアの未来となるのだろうか……

それとも――

ティザーサイト
https://www.falcom.co.jp/kai/

英雄伝説 界の軌跡 -Farewell, O Zemuria-
●ジャンル：ストーリーRPG　**●対応機種**：PlayStation5、PlayStation4
●発売予定日：2024年9月26日（木）
●価格：パッケージ通常版：8,800円（税込）　ダウンロード通常版：8,800円（税込）
パッケージLimited Edition：11,550円（税込）

フェリ・アルファイド

（CV：小倉唯）

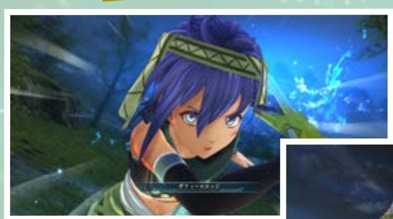
年齢：14 歳

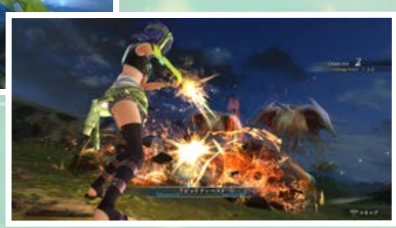
誇りと伝統を重んじる高位猟兵団《クルガ戦士団》で幼い頃から本格的な戦闘訓練を積んできた少女猟兵。本名はフェリーダ。
ライバルである猟兵団《アイゼンシルト》に纏わる一連の事件をきっかけにヴァンの解決事務所で働くようになり、中東系寺院の日曜学校にも通うようになった。
1209 年初頭に共和国首都で起きた怪事件では“侵蝕”によりヴァンたちと敵対するよう仕向けられてしまうも、それを乗り越えることに成功。更に、クルガで成人とされる 14 歳になり、一層成長している。











アーロン・ウェイ

（CV：内田雄馬）

年齢：20歳

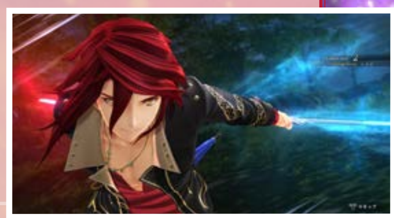
共和国の東方人街で浮名を流す遊び人であり、血気盛んな青年たちのリーダー。
三大拳法の一つ《月華流》の剣術と拳法を修めているほか、東方歌劇で“女形”の剣舞を演じるなどその破天荒ながら周りを惹きつけて止まない存在感から《麒麟児》《羅州の小覇王》とも称される。
かつて東方人街を支配した魔人《大君》の生まれ変わりとして魂を支配されそうになるも己を取り戻すことに成功。
彼を利用しようとしたシンジケート《黒月》と自分自身を見直すため、裏解決屋に身を寄せている。

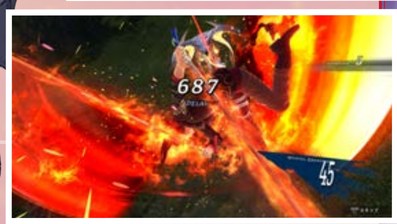


「過去にも現在にも縛られるつもりはねぇ――
俺は俺の道を行くまでだ。」









リゼット・トワイニング

（CV：石川由依）

年齢：21歳

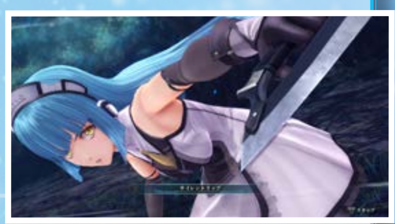
「――それがわたくしのＳＣ、
それ以上に所員としての誇りですから。」



落ち着いた物腰とクールなルックスが目を引く《マルドゥック総合警備保障》のＳＣ（サービスコンシェルジュ）。
楚々とした外見とは裏腹に、常識外の戦闘能力を秘めており、手合わせでは猟兵のフェリや天才的なアーロン相手でも対等以上に立ち回ることができてしまう程。
ゲネシスに纏わる一連の事件をきっかけにアークライド解決事務所に出向。
ＳＣのスキルを活かし、所員の一人としてヴァンたち事務所メンバーを幅広くサポートしている。
実は過去に起こったとある事件で肉体の大半を失っており、現在はその身体をマルドゥック社の擬体で補っているという。









カトル・サリシオン

（CV：田村睦心）

年齢：16歳

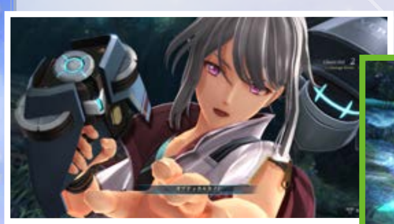
共和国の学術研究機関《バーゼル理科大学》修士課程にあり、総合技術メーカー《ヴェルヌ社》のプロジェクトにも関わる年若き研究者。
特異な環境で生まれ育ったが、幼少期にラトーヤ・ハミルトン博士に引き取られ、以降彼女を実の祖母（グランマ）のように慕い研究者としての道を進むようになった。
アークライド解決事務所には、共和国で起こったテクノクライシスをきっかけに合流。技術面で事務所の業務をサポートしつつ、師であるハミルトン博士に倣い、「技術を世の役に立てる」ことを体現しようと日々励んでいる。



「ヤン兄とエレ姉も動けるだろうし……今は僕なりの裏解決屋の流儀を貫くだけさ。」











「闇を暴き悪を討つ――
《幻夜の猫》の凄みってのを
魅せてあげるわ!!」

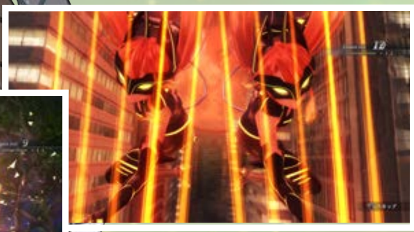
ジュディス・ランスター

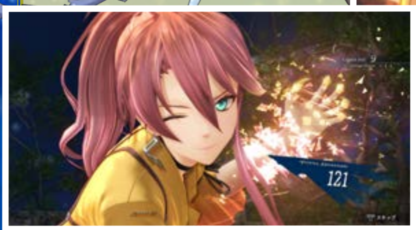
（CV：日笠陽子）

年齢：23歳

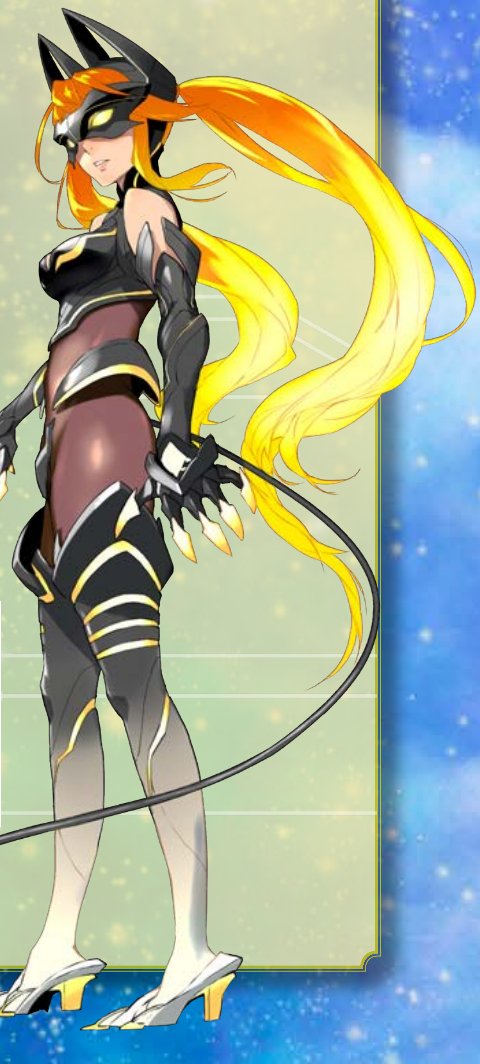


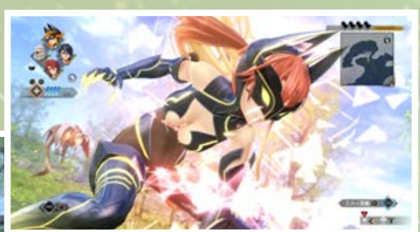






持ち前のセンスと弛まぬ努力で培われた演技力で観客を魅了している《導力映画》界のトップ女優。
悪に対して真っ向から立ち向かう強い正義感を持っているがどこか抜けており、思わぬ失敗をしてしまうこともしばしば。
後輩の若手女優ニナとは、互いを刺激し合うライバルとして、また、良き友人としての信頼関係を築いている。
女優として輝かしい日々を送る一方、裏の世界では《怪盗グリムキャッツ》として不正を働く企業や政治家を懲らしめるために行動するなど祖母・母から受け継いだ“義賊”としての役割を人知れずこなしている。







これをチェックして
新たな物語に備えよう!

KEYWORD



アンカーヴィル市

カルバード共和国首都・イーディスと古都オラシオンのちょうど中間地点に位置する地方都市。
２都市を結ぶ中継都市として栄えており、大企業の支店・支社もそれなりに進出している。
目立った特徴こそないが、落ち着いた雰囲気で暮らしやすい街として共和国市民からは一定の人気を獲得している。



黒猫の夜亭

ランスター家がアンカーヴィル市内で経営しているカフェブラッスリー。
現店主は、映画女優ジュディスの母にして先代グリムキャッツのクロエ・ランスターが務めている。
元一流アーティストが経営する店にも関わらず客との距離が近く、地元住民からも憩いの場として愛されているらしい。



アンカーヴィル総合病院

アンカーヴィル市にある大病院。
最新鋭の医療設備を揃えており、遠方から治療や診察のために訪れる者も少なくない。

戦闘をより有利に進めることができるフィールド&コマンドバトルの新システム「ZOC」とは?

「ZOC（ゾック）」は、フィールド＆コマンドバトルの両方で利用することができる新システム。それぞれ発動条件は違うものの、敵よりも早く行動することができることは共通しており、タイミング良く活用することで、より戦闘を有利に展開することができる。

フィールドバトル時

フィールドでは画面の右下に ZOC の専用ゲージが用意されており、それが溜まっている状態で対応したボタンを押すことで ZOC を発動することができる。発動中は敵のスピードが遅くなるため、一方的に攻撃することが可能に。さらに、発動中はプレイヤー側の攻撃力が激増するほか、スタンダメージも上昇するので、高い守備力の敵でも簡単にスタンさせることもできる強力なシステムだ。







POINT

プレイヤーよりも移動速度が速く、回避率の高いレアな魔獣「ポム」などは通常のフィールドバトルからコマンドバトルに持ち込むことが難しい。フィールドで ZOC を発動することで、倒しやすくなるのでオススメだ。



コマンドバトル時

コマンドバトルでは、S（シャード）ブーストを2回発動してフルブースト状態になることで ZOC が発動。発動すると対象キャラクターが連続行動をすることができるようになるほか、ブースト状態も通常より1ターン長く維持することができるのだ。





七属性の導力魔法から二つの属性を持つ高位の「デュアルアーツ」が登場!

「軌跡」シリーズおなじみの魔法・アーツ（導力魔法）。アーツには【地・水・火・風・時・空・幻】の七属性が存在しているが、今回登場したデュアルアーツは、「時」＆「水」のように、二つの属性を持ち合わせた強力な魔法となっている。デュアルアーツは消費 EP が多い分、より強力な威力を発揮することができるので、「ここぞ」という時に使っていこう。

ブラックテンタクル

時&水

黒き水沼に潜む巨大生物の触手を召喚し、大ダメージを与えると共に相手「恐怖」状態にし、更に行動力まで低下させてしまう。



グランロックフィスト



地&空

岩石で形成された巨大な拳を地表に激突させ、SS 級の超ダメージと共に相手の防御・魔法防御を大幅にダウンさせる。

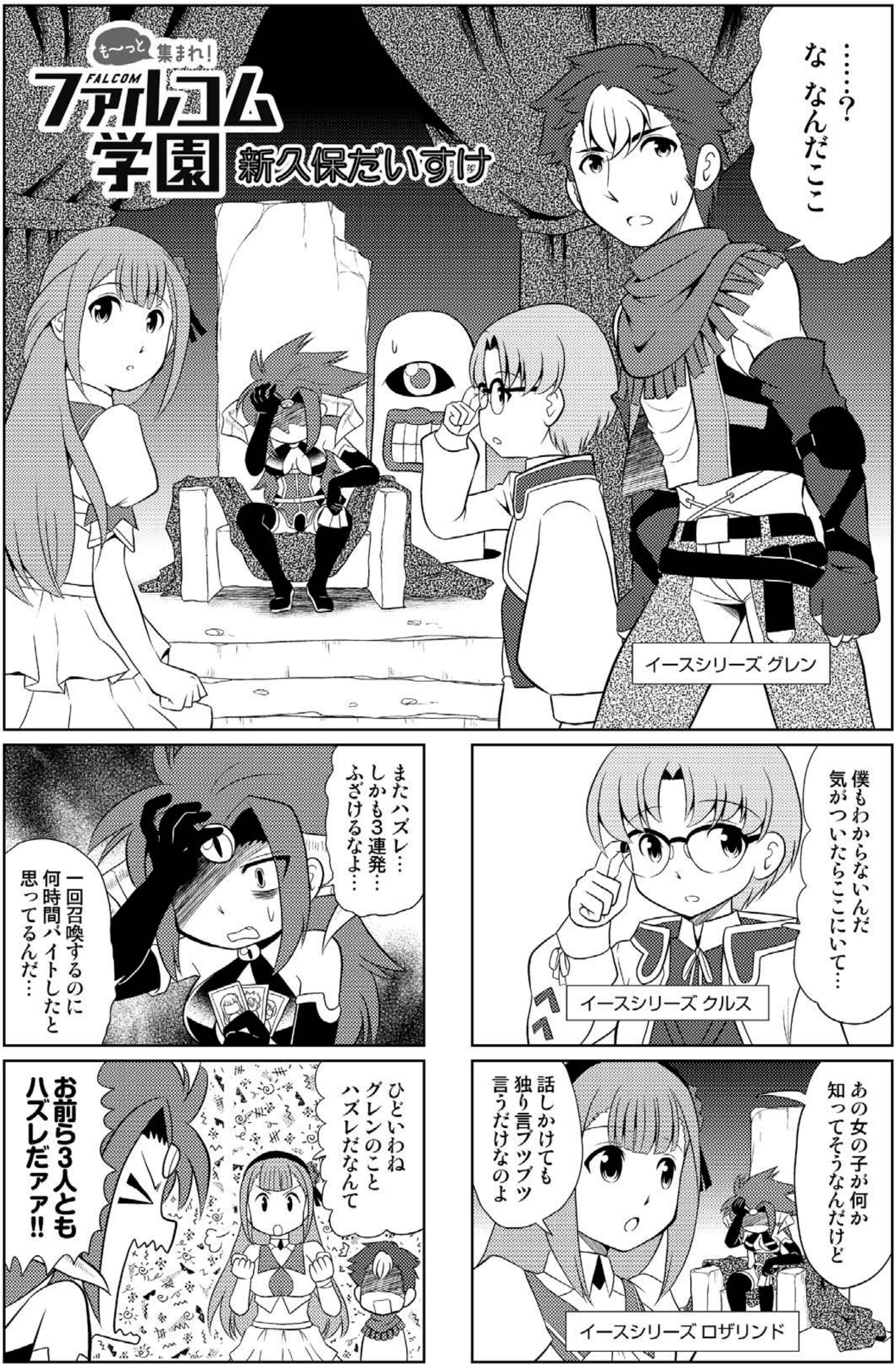
ヘルオブケラウノス

時&空

煉獄の門から出現した巨大な魔人の影が雷撃の槍を放ち、超ダメージ&スタンダメージと共に相手の攻撃力・魔法攻撃力を大幅ダウンさせてしまう最強クラスのアーツ。



★エレシア大陸からいらっしゃいませ～★



自由カルナック少年団



最強への第一歩



最近の若者



眠れる力で強くなろう



オクスリで強くなろう



実験台



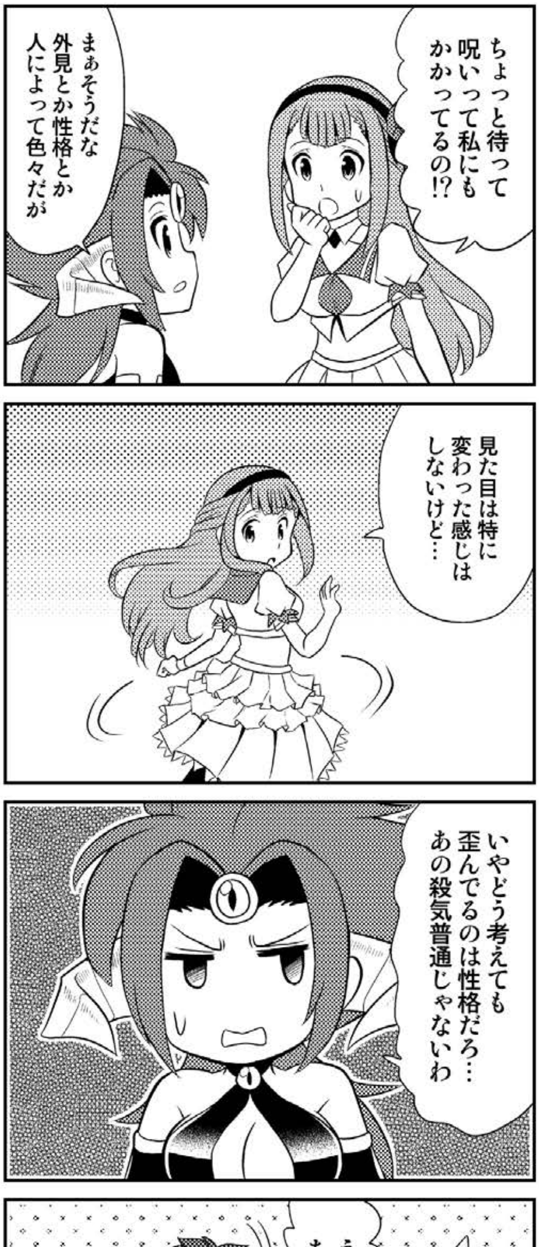
怪人で強くなろう



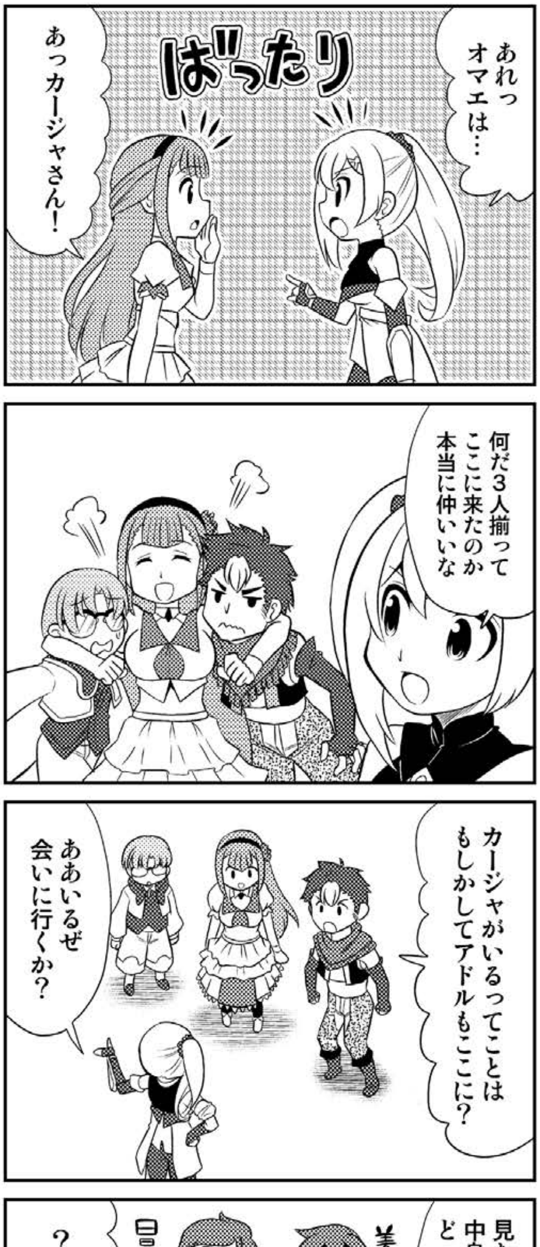
なれない呪い



少女の歪み


ちょっと待って呪いって私にもかかってるの!?
まぁそうだな外見とか性格とか人によって色々だが
見た目は特に変わった感じはしないけど…
いやどう考えても歪んでるのは性格だろ…あの殺気普通じゃないわ
えっ元からあんな感じ!?
コクリ

姫との再会


ばったり
あれっオマエは…
あっカージャさん!
何だ3人揃ってここに来たのか本当に仲いいな
カージャがいるってことはもしかしてアドルもここに?
ああいるぜ会いに行くか?
見た目そのままのアドルと中身がそのままのアドルどっちがいい?
美少女~
冒険ん~
???

暴走する観察力



「好き」の意味



眠る才能


ちっくしょー！どうすれば俺は強くなれるんだァァ
フフフ…悩んでいるな
だ 誰だ!!
ないものを欲しがるなお前の中に眠る才能僕なら引き出せる…
俺の中に眠る才能だって…？
かっこいい顔？
違う。

目覚めた才能


おーい見てくれ俺の中で目覚めた真の力を!!
真の力だと？
とうッ!!
ドゲザアアァッ
な…何の役に立つかわからないけど見事な土下座だ！
何の役に立つかわからないけど美しすぎるわ…！
フフフ…僕の目に狂いはなかったということさ！
ありがとう師匠ォォッ!!

穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースⅨ」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！

おまたせ！待望の第2巻だよ！



も〜っと集まれ！ファルコム学園②

新久保だいすけ

定価：本体900円＋税
ISBN 978-4-8021-3213-8

発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp/falcombooks

FB ファルコムBOOKS

英雄伝説 零の軌跡

四つの運命

著者：田沢大典　イラスト：松竜



日本ファルコムの大ヒットRPG『英雄伝説 零の軌跡』から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる！

原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）

価格：1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4

全国書店にて大好評発売中!!

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

ファルコムショップ『クマ男爵7号 ぬいぐるみ』『はぐはぐメタルチャーム』登場！

『創の軌跡』ナーディアがいつも抱えているクマのぬいぐるみ『クマ男爵7号 ぬいぐるみ』がファルコムショップオリジナルグッズとして登場。インテリアとしてお部屋に置いておくだけでもかわいくオシャレなぬいぐるみです。ご自宅用はもちろんのこと、贈り物にもピッタリ。

また、『はぐはぐメタルチャーム 4種』も大好評発売中。こちらは「エステル」「ヨシュア」「レン」「ティオ」の4種類です。

クマ男爵7号 ぬいぐるみ

■**発売日**：2024年9月9日（月）
■**商品ページ**：
https://falcom.shop/products/detail/649

はぐはぐメタルチャーム

■**商品ページ**：
https://falcom.shop/products/detail/648





お尻にビーズが入っているため、背もたれがなくても座らせることができます。

6月2日（日）までご予約受付中！

※以降予定数に達し次第終了

タピオカ「軌跡シリーズ」新グッズ続々登場！

株式会社タピオカから、「軌跡シリーズ」より新グッズが続々登場。ご予約受付中です。



【英雄伝説 創の軌跡　もふっと♪アニマル巾着（3種）】

『リィン』『ロイド』『ルーファス』のアニマル巾着。触り心地の良い、もふもふ素材を使用した巾着です

■**発売日**：2024年9月中旬



【軌跡シリーズ　くるみたぴぬい Vol.2（6種）】

ふわふわ生地にくるまれた、手のひらサイズのマスコット。

■**発売日**：
2024年9月中旬



【軌跡シリーズ　くるみたぴぬい Vol.3（6種）】

■**発売日**：2024年10月中旬

販売ページ
https://tapioca.co.jp/products/list?category_id=276

【大阪】6.22（土）、6.23（日）
NIPPONBASHI GAME SHOW開催決定！

大阪のジョーシン日本橋店にてNIPPONBASHI GAME SHOWの開催が決定。日本ファルコムのブースでは「英雄伝説 黎の軌跡II for Nintendo Switch」「英雄伝説 黎の軌跡 スーパープライス」の試遊体験をお楽しみいただけます。ご試遊いただいた方には『黎＆界の軌跡』特製クリアファイルをプレゼント！
さらに、イベント期間中は会場にて「英雄伝説 界の軌跡 -Farewell, O Zemuria-」の最新映像を上映。





■日時：2024年6月22日（土）～6月23日（日）10:00～17:00《入場無料》
■会場：ジョーシン日本橋店 7階イベントフロア

ファルコムトピックス
https://www.falcom.co.jp/archives/142972

＜プロジェクトEGG展disk1＞5.18から秋葉原で開催！
イベント会場には先行販売商品も！

レトロPCゲームを実際に試遊できる＜プロジェクトEGG展 disk1 ～レトロPCゲームの世界～＞が開催決定。
ファルコムのレトロゲームも遊ぶことができますので、ぜひご来場ください。



■会場：
2024年5月18日（土）～6月2日（日）　グランエンタス（秋葉原オノデン1F）
2024年6月8日（土）～6月16日（日）　ジーストア名古屋
2024年6月22日（土）～6月30日（日）　ジーストア大阪
2024年8月3日（土）～8月12日（月）　ジーストア仙台
■入場料：無料

特設サイト
https://www.geestore.com/event/gallery/egg/

※ECサイト【COSPA】での予約受付は、6月27日（木）18:00を予定しています。

＜Falcom jdk BAND LIVE 2024 SUMMER＞
東京フルライブ開催決定！

『Falcom jdk BAND』が東京・代官山でフルライブ開催決定。



■日時：2024年8月24日（土）
開場16:30／開演17:30
■会場：代官山UNIT
■チケット発売日時：
2024年6月8日（土）12:00
※入場はチケット記載の整理番号順となります（整理番号は購入先着順）

特設サイト
https://www.falcom.co.jp/jdk/2024summer/



リベール王国に姿を現した、
結社《身喰らう蛇》の牙・執行者たち。
その動きと示し合わせたかのような
エレボニア帝国の不穏な行動に王国は揺れる。
そして物語は、古代ゼムリア文明の精華・
リベル＝アークへと飛翔する！

英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～⑥

啄木鳥しんき

定価：1000円（本体909円+税） ISBN 978-4-8021-3294-7
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル



英雄伝説 創の軌跡
THE MISERABLE SINNERS 01
漫画：墨天業
《仮面の隠者》《暗殺者》《自律人形》
それぞれの思惑を胸に
運命と真実に迫る物語
定価:1000円（本体909円+税）
ISBN978-4-8021-3309-8
発行:フィールドワイ 発売:メディアパル
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©BOKUTENGOU ©Field-Y

英雄伝説 碧の軌跡 ショートストーリーズ

特務支援課メンバー4人のことがもっと好きになる！



エレボニア帝国とカルバード共和国という二大国家に囲まれ、激動の中心地となっていたクロスベル自治州を舞台とする『零／碧の軌跡』。今回は、そこで様々な壁を乗り越えていったロイド・バニングスらクロスベル警察特務支援課メンバー４人の様々な一面を見ることができる『英雄伝説 碧の軌跡ショートストーリーズ』より「ランディの章」をお届け！

製品情報

好評発売中

著　　　:田沢大典
イラスト:がおう(Ga-show)
定　　価:1,200円(税別)

ランディの章

ドレイクは部屋に入り、灯りをつける。
カジノハウスのオーナーの部屋、という言葉からは想像もつかない、質素な部屋がそこにはあった。古ぼけた大きめの机と椅子。年季の入ったソファーセット。部屋の主と同じく、派手さよりも質実剛健といった感じだ。
いつものように椅子に座り、身体を預ける。重さに耐えかねて悲鳴をあげるように椅子が鳴く。そのままドレイクは何とはなしに、部屋の片隅にあるケースに目をやった。
その部屋の調度品と同じように、使い込まれたトランク。あちこちに傷がつき、手荒に扱われたであろうことがわかる。
いい加減邪魔だな、とドレイクはつぶやくが、当然答えるものはない。
そのまま天井を見やり、ケースの持ち主の男のことを思い浮かべる。最初に会ったのはいつだっただろうか。正確な日付は覚えていないが、その時のやりとりのことは、今でも覚えている。

†

その日のカジノには、荒れた客がやってきていた。最近幅を利かせているルバーチェ商会の構成員のひとりだ。まさに商会の権威を笠に着るような下っ端ぶりで、ドレイクなどは内心であきれていた。

だが、ディーラーのエリンデに絡み出したところで、さすがに黙って見過ごすことは出来なくなった。

「てンめぇイカサマこいてんじゃねェのか、あァン⁉」

ドン！　とポーカーテーブルを割らんばかりの勢いで叩くそのチンピラ。かなりの酒が入っていることもあり、相当気が大きくなっているようだ。カジノではこういう客がたまに来る。それをうまくあしらうのも、オーナーである自分の仕事なのだが、今回は少々気が重い。

ルバーチェ商会は現会長マルコーニの代になり、帝国と接近し、密輸などで莫大な利益を上げている。この街に住み、この手の商売をしている人間なら誰でも知っていることだ。そして彼らと対立するようなことになれば、とても面倒なことになるということもまた、当然の事実として知られていた。

うまくやらなくては角が立つ。といって、あの様子では多少痛い目を見せないと納得はしないだろう。さてどうするか……と思案していると、いよいよエリンデに手を上げそうになっ

た。最早一刻の猶予もない、とドレイクが動こうと思ったその時、どこからともなくふらりとひとりの青年が現れ、チンピラの横に立った。
「まーまー兄さん、そんぐらいで」
「ンだてめェ……!?」
ドスを利かせようとしたチンピラは、自分の前に立った青年の身長に驚く。頭ひとつ以上は高いだろうか。
「ここはカジノだぜ？　アツくなるのはわかるけど、ほら、周りの客も驚いちまってるし」
そう言って青年はあたりを見渡す。その時にドレイクははっきりと顔を見た。見慣れない顔だ。仕事柄、店に来る客の顔を覚えることは業務の一環である。常連客に厚遇するために、また出入り禁止にした連中を排除するために。だが、青年は常連客でも出入り禁止の連中でもなかった。
流れ者か、観光客か。どちらにせよ、安っぽい正義感を振りかざして仲介でもしようとしているのだろう。余計なことを。ケガをさせるまえに止めないと……とドレイクが考えている間に、事態はより悪い方向へと進行していた。
「いきがってんじゃねぇぞコラァ！」
フロアにひときわドスの利いた声が響く。どうやら、仲裁に入られたことがチンピラの神

経を逆撫でしてしまったようだ。ここまで来るともう手がつけられない。ドレイクは荒事に至る覚悟を決めた。

だが、こちらが先に手出しをしてしまっては、後々やっかいである。ルバーチェの連中にいらぬ貸しを作ることなどない。あの青年に対してなんらか手出しをした時点で割り込もう、そう決めた。そうなればこちらは『客を守るために仕方なくやった』となるし、向こうには『カタギに手を出した』というレッテルが貼れる。

犠牲となる青年には悪いが、そもそも割り込んできたのは向こうなのだから、それぐらいは人生勉強だ、とドレイクはドライに考えた。

はたして、青年に向かってチンピラが胸ぐらを掴もうとしたその時。ドレイクを含めた周りにいた者達は、信じられないものを見た。

青年はまるでダンスでも踊るかのようにチンピラの手を取り、そのままひねってチンピラを投げ飛ばした——いや、床に転がしたという方が正しいだろう。とにかく、チンピラは床の上で大の字になっていた。

「おおっと、大丈夫かい?」

特に慌てた様子もない青年の言葉に、取り巻いて見ていた客達の間からクスクスと笑いが起きる。それほど、青年の動きは見事で、まるで大道芸を見ているかのようだった。だが、

その笑いが、チンピラの怒る心の火に油を注いでしまった。
「てンめぇ……ッ！」
チンピラは無様に立ち上がると、腰ポケットからバタフライナイフを取りだした。乾いた金属音で、あたりが凍り付く。
「ナメくさったまねしやがって、アァ!?」
先ほどまで笑っていた客も、この事態までは予想していなかったようで一様に息を呑んでいる。だが、青年ひとりだけが先ほどと変わらぬ様子でつぶやいた。
「あーあ、抜いちまいやんの」
このままでは確実に青年がケガをする。止めなくては。頭ではそう考えていたドレイクだが、不思議と慌ててはいなかった。彼の長年の勘が、皮膚感覚が、大丈夫だと告げていた。何故だかは分からないが、大丈夫だと。
「オラてめぇ！」
謎の雄叫びを上げて、チンピラがナイフで青年に斬りつけようとしたその時。彼の長身が深く沈み、そのまま前に出た。
「ガッ！」
勝負は一瞬でついていた。青年が放ったボディーブローは確実にチンピラのみぞおちをと

らえ、そのままくの字になって意識を失う。毛足の長いカーペットの上に、音なくバタフライナイフが落ちた。
「っとぉ。やりすぎたか？」
何が起きたのかわからなかった人々は、青年のひと声で我に帰り、一様に緊張を解いた。ホッとした空気が広がる。騒ぎが収まったと分かると、人々は自分の遊戯を続けるべく、スロットやポーカー台に戻っていった。
だが、そんな中、ドレイクだけはひとり青年を油断なく見つめていた。
「オーナー」
エリンデの呼びかけに、わかってる、とだけ返してドレイクは青年の元へと歩いていく。
「やー、カジノの人？　悪いけど、このお兄さん介抱してやってくんない？」
ドレイクは黙ったまま、青年から気絶したチンピラを受け取り抱える。年老いた外見に見合わぬ力に、青年の目が丸くなる。
「すごいなオッサン。昔なにかやって――」
「あんた、どこのもんだ？」
「え？」
「マフィア……じゃないな。猟兵(イェーガー)崩れ、ってところか」

青年の表情から笑みが消えた。
「……どうして」
「マフィアは力を見せつける。見せつけることで相手を意のままにする。しかしあんたが使ったのは、自らの手の内をさらさず、一撃で相手の戦闘力を奪う技だ。そんな技が使えるのは、このあたりじゃ国境警備隊ぐらい。……だが、ここに遊びに来るような警備隊の連中はみな常連ばかりでね。それに……」
神妙な顔で聞き入る青年に、ドレイクは言葉を続けようとした。だが、思いとどまった。
「いや、いい。とにかく騒ぎを収めてくれたことは感謝するが、相手が悪かったな」
「相手？」
「流れ者じゃ分からないと思うが、こいつはマフィアの手下でな」
「そいつは」
と言って、青年は困り顔をした。面倒はごめんだ、と顔に書いてあるようだ。
え、と惚け顔の青年に向かってドレイクは言った。
「だから居なくなれ」
「あんたがここから消えてくれれば、丸く収まる」
青年は何かを言いかけたが、すぐに口をつぐんで、踵を返した。大きな背中を、丸めて歩

き出す。
「おい」
と、ドレイクが声をかける。
なんだよ、と青年が振り返ると、ドレイクは一枚のチップを投げてよこした。青年はあわててキャッチする。手にしたチップを見ると、１０００ミラ相当の高額チップだった。
「ほとぼりが冷めたらまた来い」
その言葉を聞き、青年は笑った。それまでの張りついたような笑い顔ではなく、気持ちの良い笑顔だった。
「ランディだ」
そう名乗った青年は、踵を返すとひらひらと手を振りながらカジノハウス《バルカ》の階段を降りていった。

二週間後。
ドレイクは、カジノの休憩スペースでグラスを磨いていた。このような雑事は他の店員に任せてもよいのだが、ディーラーには自分の仕事に専念してもらいたいと考えていた。なにより、気の滅入るような会計処理の合間にする単純作業が、ドレイクは嫌いでは無かった。

念入りにグラスを磨いていると、ひとりの青年がやってくるのを視界の端にとらえた。
「よう、あんたオーナーだったんだってな」
ランディと名乗った青年は、顔を赤らめていた。アルコール香が、酒量を物語る。
「ご機嫌だな、ランディ」
「おっ？　名前覚えててくれたのかい？　うれしいねぇ〜」
そう言うとイスに座り、手にしていた紙袋を、どん、とカウンターに置いた。それをジロリと見やるドレイク。
「俺からの礼……あいや、違うな。迷惑料ってところか」
どうやらランディは、この前の騒動のお詫びとして、何か持ってきたらしい。
こっちが助けてもらったのに、ヘンなところで律儀なやつだ。ドレイクは内心でそう思ったが、もちろん表情には出さない。そのまま紙袋を開けて、中身を取りだした。
それは、酒瓶だった。中身はウイスキーで、レミフェリア公国の有名なブランドのものだ。
「結構高かったんだぜ？　でも店のオヤジがなかなか気前良くて、パカパカ試飲させてくれてさ。その男気にこっちも応えなくちゃならねぇ！　ってんで……おい、どうしたんだ？」
ランディは、とても苦々しい顔をしているドレイクに気づき、言葉を止めた。ドレイクは、ひと言。

「掴まされたな」
　えっ、と言うランディの言葉を無視し、ドレイクは背後の棚からウイスキーの瓶を取りだした。同じラベルのものであるが、よく見ると瓶の形は微妙に異なっている。
「あちゃー、同じのもう持ってたのか」
　大げさなリアクションを取るランディの言葉を無視し、ドレイクはグラスを二つ並べ、ひとつにはランディが持ってきたウイスキーを、もうひとつには自分が棚から出してきたウイスキーを入れ、音もなくランディの前に差しだした。
　ランディはきょとんとした表情で、それらふたつのグラスを見やる。
「飲んでみろ。まずはおまえが買ってきたものから」
「俺、ロックの方が好きなんだけど……」
「冷たくすると味が分からなくなる」
　不機嫌そうに言って、黙るドレイク。仕方なくランディは、自分が持ってきたウイスキーの入ってるグラスに口を付けた。
「んん、これこれ！　はー、やっぱうめぇな！」
　ドレイクはそれには答えず、トントンとカウンターを指で叩いた。自分が棚から出したものを飲め、とジェスチャーをしている。

「そんなに急かされなくっても、飲みますって……」
そう言いながらランディはもうひとつのグラスを手に取り、口にした。その瞬間、思わず目を見開く。
「……なんだ、これ。全然別モンじゃねぇか！」
「ほう、それぐらいの違いは分かるのか」
「分かるもなにも！　なんだよこれ、あんたの出してくれたものの方がぜんっぜん美味い！　深みが違うっつーか、俺が買ってきたのが、まるでションベンみてぇって言うか……」
ドレイクは咳払いをして、ランディの下品な言葉を遮る。
「他のお客様もいらっしゃることを忘れるな」
ランディは、悪ぃ、と片手を上げて謝った。
「にしても、同じものとは思えないな……」
「同じじゃない」
「えっ？　だって、同じブランドだし、ラベルも同じだし……」
ドレイクは、ランディの持ってきた瓶と、自分の手持ちの瓶をカウンターに二つ並べてみせた。
「この銘柄の最上位ブランドは、ブルータイって俗称がついてる。ラベルに、青色のタイみ

たいな意匠が入っているだろう。レミフェリア公国のとある貴族がお墨付きとして与えたもんだ」
「それは店のオヤジから聞いたぜ。『ブルータイは最高のウイスキーの証だ！』って」
「ここの蒸留所は、その貴族によって保護を受けていると同時に、出荷量を厳しく制限されている。最高のウイスキーしか世に出してはならぬ！　ってな。その量は、年間５００本。……いっとくが、クロスベルでもめったに出まわらない貴重な酒だ。ちなみに、ここの蒸留所からちょぃと離れたところに、別の蒸留所があってな。このブルータイに似た味で、瓶の形も結構似てる。値段は、十分の一以下だが、飲んべえ共には違いが分からない」
　そこまで聞き、ランディも事の次第がわかったらしい。表情がみるみるうちに微妙になっていく。
「じゃあ何か？　俺は……」
「しかしまぁ、キレイにラベルを貼り替えるもんだな」
　ドレイクのその言葉で、ランディはカウンターに頭を打ちつけた。
「ハメられた〜！」
　そう言って、やおら席を立ち、自分が買ってきた方の酒瓶を掴む。店に抗議に行くつもりなのだろう。

「やめとけ。納得ずくで買ったんだろうと丸め込まれるのがオチだ」
だがランディは歩き出した。それならば最終手段とばかりに警察に駆け込むつもりらしい。
「いっとくが、警察に行っても動いちゃくれないぞ。そういうことになってる。この街じゃな」
ドレイクのその言葉で、ランディは思わず立ち止まる。
「それに、イカサマってのは騙される方も悪い」
「けどよぉ！」
ドレイクは自分の手持ちの方のウイスキーが入ったグラスの中身をあおった。そしてグラスを静かに置く。
「こんな商売してると、そういう考えが身についちまう。……が、世の中渡ってくなら、案外役に立つもんだ」
ドレイクの言葉に、頭に血が上りかけていたランディも我に返る。再びイスに座り、ドレイクに向き合った。
「とりあえず、酒の飲み方ぐらい覚えろ。ここなら、本物の酒を静かに飲める。もちろん、お代はいただくがな」
そう言いながら、ドレイクは慣れた手つきで氷水の入ったグラスを差し出す。
「……営業活動にご熱心なことで」

ランディはそう言って、氷水に口をつけた。
「あぁ、ちなみにさっき飲んだ本物のブルータイだがな、あれは一杯３０００ミラだ。ツケにしといてやる」
気管に水が入ってむせるランディの咳き込む音を聞きながら、ドレイクはグラス磨きを再開した。

†

それから数週間後。
夜も深い時間、そろそろカジノで粘る客も少なくなり、店じまいかという頃。
ドレイクはいつものように店の中を見回っていた。
「あ、ランディさんだ～」
鼻にかかったような甘い声は、コイン交換カウンターのチェリーのものだ。その声に、よう、と応える声。

やれやれ、と思いながら声のした方に向かう。
「狸オヤジ自ら出迎えとは」
「悪いがランディ、そろそろ店じまいの時間だ。飲ませる酒はないぞ」
「まぁまぁ、そう言うなよ」
話しながら、ドレイクは奇妙な違和感を覚えていた。いつもの調子で減らず口を叩いているランディだが、雰囲気が違う。
この数週間、ランディは毎日のように《バルカ》にやってきては酒を飲み、ドレイクと話をしていた。
ほとんどは酒についての話。ドレイクは先日手痛い授業料を払ったランディに、自身の持つ酒に関する多くの知識と、ほんの少しの酒飲みの哲学を教えていた。ランディは毒づきながらも、ドレイクからのレクチャーを楽しんでいた。というより、単におしゃべりをすることを楽しんでいた――そのようにドレイクはとらえていた。
会話の最中、たまにランディの素性に関わりそうなことに話題がおよぶことがあった。例えば、生まれ故郷で作られた酒は美味しく感じやすい、という雑談から、生まれ故郷を尋ねたりとかだ。だがそういう時はランディは決まって、少し困ったような笑顔を一瞬見せてから、いつも以上におどけて、質問をはぐらかした。

『俺は生まれた時から世界じゅうを旅してきたから、どんな酒もこよなく愛せるのさ』
そんな口を叩く時のランディを見て、ドレイクはただあきれるだけで、この青年が隠したがっている過去について積極的に触れようとはしなかった。
そんなことをされるのはまっぴらだ――もし自分が同じ立場に置かれたのならそう言い返すからだ。
だからドレイクとランディの関係は、ただのカジノのオーナーとそこに足繁く通う、ちょっと変わった常連客、というものでしかなかった。
だが、今日はいつものランディとは少し違う。会話を楽しもうという雰囲気ではなく、もっとシリアスな話をするつもりらしい。そして、それがどうやら、ランディが左手に持っている傷だらけのトランクにまつわるらしいことを察した。
ドレイクの視線がトランクに注がれているのを意識しながら、ランディは少し声のトーンを落として言った。
「……ちょっと、話があってな」
ドレイクは軽く鼻をならし、休憩スペースへと向かって歩き出した。ランディも黙って、それについてくる。
ドレイクはカウンターに入り、いつもの流れるような手つきでグラスに氷を入れる。ラン

ディが一番気に入ったジンを注ぎ、炭酸水を注いでステアする。
定位置である席に座ったランディはジントニックを受け取り、口を湿らせる程度飲み、グラスを置いた。
少しの間、ふたりの間に沈黙が流れる。遠くでスロットマシンが動いている音だけが響いていた。
やがて、意を決したように、ランディが言った。
「今日はひとつ、頼みがあるんだ」
ドレイクは答えず、軽く眉毛を上げる。続きを言え、ということだ。この数週間ですっかり相手の言わんとしていることが分かっているランディは、そのまま続けた。
「クロスベルの国境警備隊に入ることにしてさ。ほら、さすがに食い扶持がないとしんどいっつーか、働かざる者食うべからずっつーか」
「それで?」
少し声のトーンがあがったランディ、それを押さえつけるかのようなドレイクの声。
ランディは、床に置いたトランクに目をやりながら、言った。
「——何も言わずに、こいつを預かってほしいんだ」
ドレイクは直感した。

これは、厄介な代物だ。血と硝煙の匂いがする、という分かりやすい類のものではない。だが、これは目の前にいる、どこか底を明かさない青年の過去に、秘密に繋がっている。そしてその青年の背後には、猟兵団の影がちらついている。

これを預かることで、様々な災厄を呼び寄せる可能性がある。

なるほど、これを持って国境警備隊には入れない。あそこは寮生活が基本であり、隊員のプライバシーは最低限しか保証されない。こんな大荷物を持っていたら、それだけで怪しまれてしまう。ましてや、その中身を明かせない、ヤバいものが入っているならなおさらだ。

いいや、そうじゃない。ドレイクは気づいた。

おそらくランディがここに持ち込んだのは、そういう理由もあるが、もっと根本的な問題だろう。

この荷物は、ランディの触れられたくない過去に直結しているに違いない。それを見ず知らずの他人に預けることは、奴の心の最もなぞられたくない部分を晒すことになる。そんなことが出来るほど、目の前にいる青年は図太くも、老いてもいなかった。

おそらくその傷は、生々しすぎるのだ。そしてランディの心は、柔らかすぎた。

ランディはじっとドレイクを見つめていた。次の言葉を待っているのだろう。

ドレイクはひとつため息をつくと、ケースに目をやりながら言った。

「期間は？」
「……いいのか？」
「自分で持ち込んでおいて、なにを言っている。で、いつまでだ？」
「少なくとも、俺がクロスベルにいる間は」
長いのか短いのかまるで分からないな、とドレイクは思った。とはいえ、それで断るつもりはもとよりない。ただ、部屋に置くか、それとも納屋にでもつっこんでおくか、期間によって決めようとしていただけだった。
なんにせよ、話はまとまった。ドレイクはカウンターから出て、ランディの置いたケースを持ち上げようと、持ち手に手をかけようとした。
「それと」
「まだなんかあるのか？」
「……俺が死んだら」
神妙な顔つきでランディは続ける。
「中を開けて、ジャンク屋あたりにバラして売っぱらってくれ」
今度はドレイクがランディをじっと見つめる。ランディは、ただ無言で見つめかえした。
「面倒な預かり物を頼んだ上に、万が一の処分までとは」

「あんたにしか頼めないんだ」
普段のおどけた表情からは想像も出来ない、まっすぐで、少し危なっかしさを感じるまなざし。それを受け止めて、ドレイクは言った。
「報酬は」
ランディは、胸元から何かを取りだし、ピンとはじいた。弧を描きながら飛ぶそれを、ドレイクは右手でキャッチする。手のひらを開くと、そこには以前に渡した１０００ミラのチップがあった。
そういえば、あの時の借りをまだ返してなかったな。
ドレイクは思い出し、ニヤリと笑う。そこでようやく、ランディの顔にもいつもの笑顔が戻った。
ドレイクは、今受け取ったチップをそのままランディへとはじき返した。
「ロハで引き受けてくれるとは、優しいねぇ」
「そいつが引換証だ。無くしたら相手がおまえでも渡さないからな」
了解、と言ってまた胸元へとチップをしまう。それを見届けて、ドレイクは今度こそケースの持ち手に手をかけ、持ち上げようとして。
まったく持ち上げられなかった。

「あぁ、言ってなかったけど、それすっげー重いから。持ち運ぶ時に腰痛めんなよ？」
そう言ってニヤニヤ笑うランディの顔を見ながら、ドレイクは怒鳴った。
「だったら自分で運べ‼」

†

奴と初めて会った時のことを思い出すなんてな、と思いながら、ドレイクはいつものように、カジノハウス《バルカ》にあるバーのカウンターでグラスを磨いていた。
これだけは、どれだけ長くいる店員がいたとしても、譲らない仕事だ。例えそれが、カジノの売上を調べた後、夜中になったとしても、彼はひとりでグラスを磨いていた。日課であり、今さら誰か他の人間にグラスを触らせるのも、なんだかシャクだから、というぐらいの理由である。
時間はすでに夜中の三時を回り、カジノ内も人影はまばらだ。そこに、その男は突然現れた。
「よっ」

予知夢かよ、とドレイクは自分にあきれる。
「なんでぇ、まだくたばってなかったのか」
「おかげさまで。っつーか、それが客に対する態度かぁ?」
「お客様?　フロアの方にはいるが、このあたりにゃあ客なんぞひとりもいないだろうが」
「オヤジ……働き過ぎてついにボケちまったか」
わざとらしい泣き真似をするランディを無視して、ドレイクは磨いていたグラスをスッとランディの前に置く。なにを飲むか?　という無言の合図だ。
「今日はとびきり上等な奴をくれよ」
「そんな酒をドブに捨てるような真似は出来ねぇ」
「酒だって俺みたいな人間に飲まれれば本望だろうさ」
「言ってろ」
ドレイクは悪態をつきながら、ランディに背を向け、酒瓶の並んだ棚を見る。
何かある。
そうドレイクは睨んだ。しらふで、そのくせ口数が多い。普段のランディを知る人間からすれば、なんてことのない変化だろうが、ドレイクはその変化に何かひっかかりを覚えた。
その感覚が何か確かめるために、ひとつの酒瓶に手を伸ばす。ごく自然な位置取りでラベ

ルが見えないようにし、ランディの目の前に置かれたグラスに琥珀色の液体を注ぐ。
ランディはグラスを持ち、軽く香りを楽しんだ後、ひと口つける。と、そこで目を見開いた。
「こいつは……」
驚くランディの表情を見やり、ドレイクが言った。
「分かったか」
「分かったもなにも、忘れるわけがねぇよ。あんたにはじめて飲ませてもらったやつだ。パチモンじゃねぇ、本物のブルータイ」
ドレイクは目を細める。
「舌だけは一丁前になったらしいな」
ランディはその悪態には答えず、ふた口、三口と飲み、琥珀色の液体を愉しんだ。
「……美味い」
空になったグラスを愛おしそうに見つめ、つぶやく。まるでそれが、最後の晩餐に出てくる酒であるかのように。
その様子を見て、ドレイクは自分の中で確信を深めた。
「こんな上物を飲ませてもらったんだ。お代は弾まないとな」
そう言ってランディは、懐に手を入れ、一枚のチップを取り出す。

そのチップを見ても、ドレイクは顔色を変えなかった。以前自分が引換証として渡した、1000ミラのチップ。

「こっちだ」

首を振って促す。ランディはグラスを静かにカウンターに置き、ドレイクの後に続いた。

ドレイクはオーナー部屋にランディを通した。そして、執務をする机の横に置かれ、ホコリをかぶっている大きく古ぼけたトランクに目をやる。

これは災厄を運んでくるモノ。これを預かった時は、確かにそう感じていた。

そして、断片的に漏れてくる情報、遠くの街からの流れ者のぼやき、マフィア達との避けようのないぶつかり合いの中で、ドレイクはランディの正体にひとつの確信を得た。

「うわ、きったね」

そう言って取っ手のホコリを払う。この一見陽気に見える青年の抱える過去、その闇は暗く、重い。

そして残念ながら、その闇を打ち払うだけの力も気概も、自分にはすでに失われたものだった。

残念ながら、だって？

ドレイクは自分の心に問いかける。どうやら自分は、この青年のことを、そんなにうっとおしくは思っていなかったらしい。

多くの客を相手にし、それゆえ誰とも深く関わることを辞めた、自分がだ。

いま思えばそれは当たり前のことなのかもしれない。誰とも深く関わることを辞め、ひとりで生きてきた。つまり、自分とランディは似ている。残念ながら。

「本当に残念だよ」

思わずつぶやく。その声に、ランディがハッとなる。その表情に、一瞬痛みに似たものが走る。

そういう意味じゃない、と否定しようとして、ドレイクはやめた。代わりに、手のひらを差し出す。

ランディは神妙な顔をして、ドレイクの手のひらの上に、かつて手渡された高額チップを置いた。

「確かに」

握り込み、腰のポケットへとしまう。それで、手続きは終了した。

ランディは、トランクをさも軽そうに持ち上げる。それじゃ、と軽く言い放ち、ドアに向かおうとしたが、振り返った。

「そのよ、ないと思うが、もし……」

ランディの視線が泳ぐ。対照的に、ドレイクはじっとランディを見つめていた。

「もし、支援課の連中が来ても……黙っててくれないか？」

伏し目がちに話すランディ。なので、彼の感情はあまり伺いしれない。ドレイクはその様子を見つめ、沈黙で返答をした。

「……それじゃ」

ランディはドアから出て行こうとする。ドレイクはかけるべき言葉を探したが、見つけることはできなかった。

ドアを閉める間際、立ち去る男の横顔は、ドレイクの知らない、ひとりの猟兵(イェーガー)のものだった。

†

その翌日。
ドレイクがいつものようにカジノで仕事をしていると、客人が尋ねてきた。
「これは皆さん」
ロイド達をはじめとする、特務支援課の面々だ。だが、そこにいつもいるはずの男がいない。
一瞬、別れ際に見せた、伏し目がちの顔を思い出す。そしてその時頼まれたことも。
だが、ドレイクはひと呼吸でそのことを飲み込み、続けた。
「……もしや、ランディの件でいらっしゃったんですか？」
「やはり彼はこちらに？」

ロイド達の顔に、やはり、という確信が広がる。
ランディの切実な願い。それを一瞬の逡巡だけで反故にしてしまったのは、簡単な理由だった。
ロイド達の表情は真剣さと共に沈痛さも含んでいた。それは、戦力がひとり減ったから、というものではない。大事な仲間、かけがえのないものを失おうとしている、その切羽詰まった意識からだった。
悪いな。だが俺は言わないとは約束しなかったぞ、と形だけ心の中で謝り、ドレイクは話

を続ける。
「ええ、夜中の３時くらいに店にフラリと現れまして……。しばらくここで飲んでから帰って行きましたが」
支援課の面々は、顔を見合わせながら、まっさきにここに来たみたいだ、などと話をしている。
やはり支援課には戻らなかったか、などとドレイクが考えていると、ひとりの青年、確かワジと名乗る男が、尋ねてきた。
「それで、その後どこかに行くとか言ってなかったかい？」
「いえ、どこに行くとは特に言っていませんでした。ただ、どうも飲んでいる最中、いつも以上に減らず口が多くて……」
ここから先を言うべきか。今までのドレイクなら決して口を割らなかっただろう。だが、いまは彼らに、ロイド達に賭けたい気分だった。
「おまけに帰り際、ある物を私から引き取って行ったんです」
「ある物……ですか？」
「ええ。随分重いトランクで中身は私も存じません。二年前、ランディがこの街に来たばかりの時に預かったんです」

そこまで一気に言って、ドレイクはひと呼吸置いて、ゆっくりと告げた。その言葉の意味を、正しく受け取ってもらうために。

「『俺が死んだら、ジャンク屋あたりにバラして売り払ってくれ』と言って」

ロイド達の顔に、明らかな動揺が広がる。当たり前だ。自分が死んだら処分して欲しい、と言っていたものを引き取るということは、死を覚悟した、ということだからだ。

「そんな……」

「ランディ先輩……」

「……らしく無さすぎです」

女性陣から悲痛な声が上がるのを聞いて、不謹慎ながらドレイクは妙におかしくなった。なんだ、おまえ、ちゃんとモテてたんじゃないか。しかも、タイプは違えど、どの子もお前のことを本気で心配している。まぁ、色恋じゃあないところが残念だが。

対象的に、リーダーであるところのロイドは、黙って何かを考えている。この事態になっても、驚きはすれど取り乱しはしない。なるほど、あのランディがリーダーと見込んでついていくだけのところはあるな、とドレイクは考えていた。

彼は、カジノのオーナーではなく、ひとりの友人として、ランディについて話をすることにした。

「……ヤツの経歴については、私もある程度は存じています。ですが、過去にどんな事があったのかまでは知りません」

知り得ることもできたが、それは避けてきた。それを引き受けるのは、自分ではないと思い込んで。だから結局、若い人間に託すことしかできない。

「それを知ってヤツの力になれるのは、恐らく、皆さんだけでしょう」

そう言って目を閉じる。そこにあるのは、わずかばかりの悔恨と、自分のツケを払ってくれる若者への敬意。

いや、そもそも彼らは、ツケだとは思わないだろう。自分達が助けたいから助けるのだ。その無鉄砲さ、ほとばしる情熱こそが、彼らを突き動かす。そしてその熱は、きっと閉ざされてしまった奴の心をこじ開けるだろう。

「……はい。そうありたいと思います」

ロイドの力強い言葉を聞いて、ドレイクは自然と頭を下げた。

「よろしくお願いします」

†

それから、しばらくの後。
クロスベルが独立国を宣言したり、それが無効になったり、テロリストに襲撃されたり、そのせいでカジノどころか街自体が大変なことになったりと、いろいろなことがあった。
だが、いちカジノオーナーであるドレイクは、ただ粛々と、精一杯、日々を生きていた。
風の噂で、一連の大がかりな事件の解決に、特務支援課の面々が大きく関わっているらしいことを聞いたが、それを本人達に確かめる術もなく、日々は過ぎていった。
そして、いつものように、ドレイクが夜にカウンターでグラスを磨いていると。
「よっ」
その男は、ひょっこりと顔を出して、ドレイクの目の前のカウンター席に陣取った。
「ご活躍だったそうじゃねぇか」
ねぎらい2：皮肉8の割合で声をかける。と、ランディは漬けすぎたピクルスを食べた時のように、眉根を寄せた。
「心にも思ってないこと言うんじゃねぇよ、狸オヤジ」
ククッと笑うドレイク。



「すっかり顔を出さないんで、せいせいしてたんだがな」
そう言いながらも、ドレイクはランディの前にグラスを置いた。そして、どの酒を注ごうかと背中を向ける。
「おっと、今日は俺のおごりだ。グラス、もうひとつ出してくれ」
は？　と声を出しながら振り返ると、そこにはひとつ酒瓶が置かれていた。
「……そいつは」
「今度こそ正真正銘の本物、ブルータイだぜ」
ランディの置いたその酒瓶を手に取り、ラベルを見る。
「おまえ、これ」
値段もだが、市場に出まわる数の少なさを考えれば、いつでも買えるものではない。おそらく、これを手に入れるのを待つために、ここに顔を出さなかったのだろう。
「今日は特別に！　お裾分けしてやるぜ」
「……いらねぇ」
「ちょ⁉　せっかく持ってきたのに⁉」
「おまえに借りを作るぐらいなら、指をくわえて見ている方がマシだ」
他愛もない軽口の叩き合い。だが、以前ここに来た時と違い、ふたりの間に妙な緊張感は

ない。
「かーっ！　人の好意を素直に受け取れないって、これだから狸は！」
そう言いながら、ランディはドレイクの持つ酒瓶を奪おうとする。が、ドレイクはひょいと身をかわして避けた。
「いらねぇ。が、おまえがまた偽物を掴まされたんじゃないかと心配なんで、味見してやる」
そう言いながら、手早く栓を開け、グラスに注ぐ。ひとつは自分の手元に置いたグラスに。ひとつはランディの目の前に置かれたグラスに。
グラスに琥珀色の液体が注がれるのを仏頂面で眺めるランディ。
そしてグラスを手に取った。同じくグラスを手にしたドレイクに、ランディが言う。
「オヤジのツンデレなんてうれしくねっつーの」
「……世話、かけたな」
「何のことだ？」
ドレイクの物言いに思わず苦笑しながら。
「乾杯」
「乾杯」
そうしてふたりはグラスをあおった。

琥珀色の液体が、喉を通り、芳醇な香りを鼻孔に運ぶ。
ＢＧＭは薄く流れるジャズと、遠くで鳴るカジノのスロットの派手な音。
ふたりの間には、心地良い沈黙が流れる。
その沈黙をやぶり、先に口を開いたのは、ランディだった。
「……なぁ、これ」
「言うな。……言わなきゃ、偽物だってバレねぇ」
「言ってるじゃねーか！」
また騙されたー！　と席で騒ぐランディを見て、カジノに興じていた何人かの客が何事かとこちらを見る。
その様子を見ながら、ドレイクは思うのだった。
まだまだこいつには、酒のことを教えてやる必要があるな、と。

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.160プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）

2：面白かった記事の番号→
つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）

3：アンケート①『界の軌跡』新要素「ZOC」「デュアルアーツ」の印象は？
アンケート②『界の軌跡』に登場してほしいキャラクターは？

4：希望するプレゼント番号

5：ご意見・ご感想など

記事一覧

応募締め切り　6月25日（火）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊FALCOM MAGAZINE Vol.160

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/